論文要旨

1. 論文名　虐待による被害が児童の知的機能に及ぼす影響―知能検査を用いた計量心理学的分析―

2. 氏　名　緒方康介

（要　旨）

虐待による被害が児童の知的機能に及ぼす影響を様々な観点から明らかにすることを研究目的とした。この目的に鑑みて WISC-III（Wechsler Intelligence Scale for Children Third Edition）知能検査を研究の方法論として採用した。まず児童の知的機能に与える被害の影響が虐待種別ごとに異なることを４つの調査から明らかにした。身体的虐待は【絵画完成】と【絵画配列】の２課題に影響を及ぼしていた（研究①）。性的虐待は【絵画完成】に影響を及ぼしていた（研究②）。心理的虐待は【絵画完成】と【知識】に影響を及ぼしていた（研究③）。ネグレクトは【知識】と【算数】に影響を及ぼしていた（研究④）。

【絵画完成】の成績が相対的に高くなるという身体的虐待（研究①）と性的虐待（研究②）で得られた結果は，先行研究でトラウマ症状との関連を示唆した知見と合致していた。そこで【絵画完成】の成績が相対的に高くなることは，虐待によるトラウマ症状と本当に関連しているのかを３つの調査で検証した。トラウマ症状を測定する心理尺度を用いたところ，心的外傷後ストレス症状と解離症状で虐待群は対照群よりも有意に高かった（研究⑤）。４つの虐待種別を無視した被害児全体の WISC-III 下位検査では，やはり【絵画完成】の成績が相対的に高かった（研究⑥）。そして虐待被害児の心的外傷後ストレス症状は，【絵画完成】における相対的な成績の高さと有意に相関していた（研究⑦）。したがって，虐待被害児の【絵画完成】における成績が相対的に高いことは，心的外傷後ストレス症状と関連しているという先行研究で示唆された仮説は支持された。

ネグレクト（研究④）で得られた【知識】と【算数】の成績が低いという結果は，先行研究で繰り返し報告されている学力に関連した知的機能が低いことに起因しているものと考えられた。そこで K-ABC（Kaufman Assessment Battery for Children）という学力指標を備えた知能検査を用いることにより，虐待被害児の知能と学力の乖離を測定した（研究⑧）。知能よりも学力の方が有意に低いという結果が得られたことから，虐待被害児はアンダーアチーバーの状態に陥りがちであると考えられた。裏を返せば，この知見は知能の水準まで学力を引き上げることが可能であることを示しており，知的機能の回復可能性を示唆しているものと考えられた。

心理的虐待（研究③）で得られた【絵画完成】と【知識】の成績が低くなるという結果は，被害体験により知的機能の発揮が抑制されているものと考えられた。そこで WISC-III と K-ABC における検査特性の違いを利用して，虐待被害児で抑制されている知的機能を推し量った（研究⑨）。顕在している知能水準の測定に長けた WISC-III と潜在的な知能水準を推量しやすい検査特性を備えた K-ABC の結果を比較すると，虐待被害児では有意に K-ABC での知能水準が高かった。この結果は虐待による被害体験が知的機能の発揮を抑制しているという解釈を支持するものであり，抑制を解くことができれば知的機能を回復させうる可能性を逆説的に示唆しているものと考えられた。

虐待の被害体験による知的機能への影響を回復させうる可能性を直接的に支持する知見を得るため

に，児童福祉施設への入所が知的機能の回復に関してどのような効果を持つのかが調べられた（研究⑩）。児童福祉施設への入所前後における WISC-III の検査結果を虐待群と対照群で比較分析したところ，虐待被害児が児童福祉施設へ入所した場合に動作性知能は向上し，虐待被害児が入所せずに虐待家庭で生活していた場合には【算数】課題の成績低下が認められた。この結果は，被害児を児童福祉施設へ入所させることの肯定的な効果と虐待環境下で生活させることの否定的な影響を示している。したがって少なくとも知的機能に関しては，児童福祉施設への入所のような支援方法により，虐待被害による影響から回復する可能性があるものと考えられた。

以上の知見に基づいて，虐待被害という観点から犯罪心理学への貢献，知能理論という側面から計量心理学への寄与，知能検査の実践的応用という見地から児童相談所の児童心理司への臨床的示唆などが考察された。計量的手法に専心していること，被害回復に関しては間接的な知見にとどまっていることなどの限界を踏まえつつ，虐待による被害体験が児童の知的機能に及ぼす影響を様々な観点から明らかにすることができたと結論した。